

■はじめに

海外から、そして日本国内から、新たなお客さまを中国地方へ、そのきっかけになればとの思いで客船「ガンツウ」と水陸両用機「せとうちSEAPLANES」を使った旅を提案したい。



私は、昨年1月に「せとうちLTKトラベル(旧せとうちクリエイティブ&トラベル)」の代表に就任した。それまでライフスタイル誌や建築とデザインを軸にライフスタイルを提案する雑誌の編集者をしてきた。大阪、京都に次いで取材の多かったのが瀬戸内を中心とした中国地方。そこで取材を行う中で「せとうちホールディングス」と出会い、取材する側からモノをつくる側に回った。そうした経験も踏まえて、紹介させていただく。

■グループ事業の紹介

～造船企業の町づくり事業～

社是は「せとうちと共に生きる」、「せとうちから世界へ、世界からせとうちへ」。私もこの考え方に共鳴を受け、東京で瀬戸内に人を呼ぶべく活動している。

造船業を主軸としたツネイシグループの一社であるせとうちホールディングスが、創業事業として、6年前に町おこし、まちのために尾道で始めた活動をベンチャー企業化したのが発端。最初の事業は「ディスカバーリンクせとうち」という社名で、まちおこしの活動を行っている。

先ほど、中国運輸局木嶋部長から観光消費についての話があったが、観光客が宿泊すると地元にお金が落ちる。尾道の課題は、観光客が宿泊しないことなので、宿づくりが急務だった。

そこで、広島県の県営上屋(うわや)2号という倉庫で「ONOMICHI U2」という宿泊施設を組み込んだサイクリストフレンドリーな複合施設を作った。しまなみ海道は、尾道から今治まで自転車で海を渡れる世界でも類を見ないところ。台湾や欧米から訪れるサイクリストにも対応した施設にした。

ここには、ホテル以外にも自転車ショップ、レストラン、お土産屋、洋服屋、カフェ、バーなど、様々な施設を取り込んだ。外国のお客さまは、多いときには7割ぐらい、平均して3割ぐらいの宿泊率である。

グループの事業には、まちおこし事業の他に、建設事業、繊維事業もある。アビエーション事業もあり、水陸両用機で使っているKODIAKという機種を製造するQuest Aircraft社(米国)を買収し、その飛行機を世界に輸出するとともに、日本に持ってきて観光の足として様々な事業を展開している。また、ガンツウは、「せとうちクルーズ」が運航し、せとうちLTKトラベルが旅行商品として販売している。

■客船「ガンツウ」

～瀬戸内の海に浮かぶちいさな宿～

ガンツウとは、鞆の浦や尾道での言葉で青いイシガニを指す。味噌汁に入れると深い味が出るので、ガンツウのように瀬戸内の魅力を味わってほしいという思いで客船の名前をつけた。



©Photo by Tetsuya Ito

「せとうちDMO」の融資を受け、同じグループの常石造船(株)の創業100年記念事業として建造。

ガンツウは世界で類を見ない和のテイストを持ったクルーズ船。例えば、日本が誇る客船「飛鳥」は、全長240メートルで幅もあり、巨大なホテルが海に浮かんでいるようだが、ガンツウは長さが82メートル、幅が13メートル、高さも3層で小さな旅館が海に浮いているような感じ。そのコンセプトを瀬戸内に浮かぶ、ちいさな宿と称している。

部屋数は19室で、ほかのクルーズ船にはない、とてもインキュベータなスタッフのサービスや、大きなお風呂、瀬戸内海の穏やかな海と客室の近さなど、今までのクルーズでは味わったことのない体験を提供する。

■ツアーの内容～東は小豆島、西は上関まで～

ツアーはベラビスタマリーナ(ガンツウの母港)を発着する2泊3日がメイン。マリーナを出て、西回りが広島市や宮島まで。3泊4日になると山口県の上関まで行く。東回りは、岡山、高松、小豆島や直島へ行く。

マリーナを出てからどこの港にも泊まらない。瀬戸内漂泊と称しており、船外体験にてアートで有名な直島や、厳島神社のある宮島を案内する。

瀬戸内海の狭い航路は、ガンツウだから行ける場所、そのガンツウも入れない小さな港は、10名乗りのテンダーボート2隻で行くことになる。有名な直島とか、宮島も瀬戸内の魅力だと思うが、

私どもが観光客の方に知ってほしい瀬戸内の姿は、本当に小さな港で、美しいまちの集落や段々畑が残っているところ。そうしたところへテンドーボートでお連れする。

ちなみに、ガンツウの料金は1室2泊お一人様40万円～100万円。食事、アルコールに加え、広島空港またはJR福山駅への車の送迎、船外体験もすべて含まれている。

■ガンツウが目指しているもの

～瀬戸内海に特化したクルーズの楽しみ～

ガンツウでもまちおこし、地域と一体ということを目指している。建築家の堀部安嗣氏は、住宅建築の専門家だが、あえてガンツウの設計を依頼した。目指したのは、瀬戸内海の風景と一体となるデザイン。一番の特徴は切妻屋根で、瀬戸内海は昔から海の道として活用され、すべての風景が海からの視点でできあがっている。

鉄道や道路が整備され、人の視点も次第に海から遠ざかったが、もう一度海から瀬戸内を見直していただきたいという思いでこの船を導入した。ガンツウは、普通のクルーズ船と違い瀬戸内海から出られない。瀬戸内海に特化した船で、瀬戸内海を盛り立てるために造った船といえる。

船体はシルバーだが、夕日のとき船体は真っ赤に染まる。天気の良い日は海の青と空の青を映してブルーに染まり、瀬戸内の風景と一体になる。曇りのときも、その中でしっとりとたたずむような姿で、まさに瀬戸内と一体となるようにデザインしている。

ガンツウは屋根と船体、それから、穏やかな瀬戸内海の海面に非常に近いところに客室があるのが特徴。19ある客室すべてが海に面している。一番多いタイプのテラススイートは50平米。ガンツウのこだわりは、お風呂。客室すべてに大きなバスタブがついている。すべて海に面したところにバスタブがあり、そのテラススイートの中でも2室だけは特別にテラスの代わりにヒノキ風呂が据えつけられ、まさに瀬戸内海の穏やかな風景を眺めながらお風呂に入れる感じになっている。

客室も、ホテルというよりは旅館のテイストで、部屋（客室）に上がるときは一度靴を脱いでもらう。堀部氏なら、自宅のようにくつろげる空間をつくっていただけるといってほしい。

また、ガンツウで使われているものは地元、瀬戸内の職人が作ったもの。竹原市で作られた竹細工の椅子をラウンジで使ったり、い草の円座も縁側で用いている。これはディスカバリーリンクせとうちというまちおこしの事業が伝統産業を

守るプロジェクトを行っており、備後紘なども積極的に船内で使用している。

ミシュラン2つ星の老舗割烹「重よし」（佐藤憲三大将）がメインダイニングの和食の料理を監修。鮎カウンターは、淡路島の寿司屋「互（のぶ）」の監修。基本的には瀬戸内で捕れたもの、お肉も中国地方、瀬戸内のものを使うということで献立を組み立てている。

朝食もすべて瀬戸内の食材を用いている。

ほかにも洋食、昔ながらのカレー、ハンバーグなども用意しており、好きなものをお好きなだけというコンセプト。

■インバウンドの取り組み

～今後はインバウンドを3割に～

現在のお客さまは98%が日本の方。当初の目標は旅慣れた日本人にガンツウを利用していただくということであったが、昨年12月に初めて外国語のウェブサイトを開設すると同時に、海外の取材も受けた。本格的なインバウンドは2019年1月からを目指している。積極的にインバウンドを受け入れて、全体の乗客の30%程度は外国人の方にしたい。

■水陸両用機「せとうちSEAPLANES」

～空から瀬戸内の風景を楽しんでいただきたい～

せとうちSEAPLANESは2016年8月の開業で、これまで3,000人が利用。ガンツウは海から、せとうちSEAPLANESは空から瀬戸内の風景を眺めて楽しんでいただきたい。

機体は基本的に白色だが、1機だけ宮崎駿監督が塗装デザインを監修されたラウロッサという赤い機体がある。エンブレムはジブリの鈴木プロデューサーにより「SETOUCHI SEAPLANES」と書かれている。本機は定期遊覧便に組み込まれているが、残念ながら、機体を指名しての予約はできない。

せとうちSEAPLANESは水陸両用機で、水の上でも離発着できるが、車輪もあり空港でも離発着可能。ガンツウのお客さまの送迎は、広島空港からベラビスタマリーナまで、車で約70分だが、水陸両用機なら10分。広島空港から多島美を眺め、そのままガンツウに乗船できる。

ガンツウとせとうちSEAPLANESを組み合わせることで、より観光の幅が広がるのではないかと考えている。

（担当：徳永）

